



着色管理をしっかり行い 高品質生産を！

【指導員】 園芸果樹課 大和屋 尚享

これからリンゴの中生種、晩生種の収穫を迎える中で、着色管理の作業が重要になります。果実の着色が進む条件は、①果実に光が十分に当たること、②10～15℃の低温に遭遇すること、この2点です。温度と光の関係が着色を左右するので、まずは園地の光の条件を良くするため樹冠内の光環境を改善し、着色管理を遅れないように進めましょう。

【支柱入れ】

果実が大きくなり成枝が垂れ下がりはじめると、枝が重なりやすくなり、果実に光が当たり難くなります。支柱入れや枝つりを行い、枝と枝の間隔を空けて、光が樹冠内部までしっかり入るようにしましょう。

【葉摘み作業、玉回しの実施】

「ふじ」では9月下旬など早い時期から作業を始める場合、最初は直接果実に付いている葉を軽く摘み取る程度にして、2回目以降は強めに取るようにします。この時、同時に玉回しも進めると効果的に着色を促す事ができます。

なお、葉摘みや玉回し作業は果実の表面温度が上がる10時から15時頃に行い、早朝や夕方は下枝など直射日光が当たりにくい箇所を行うようにしましょう。日焼け防止に努めましょう。



日焼けしたリンゴ

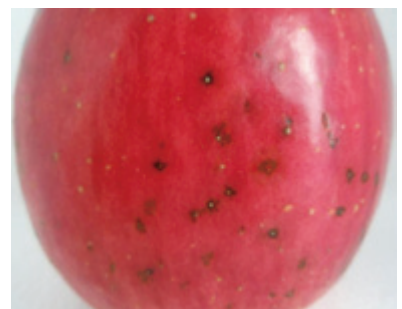
8月中旬に猛暑日が続いたことで、日焼け果の発生が多くなっております。炭そ病を

誘発しますので、日焼け果は必ず摘み取るようにしてください。

【リンゴの最終散布にペフラン液剤を必ず散布してください】

ここ数年、「ふじ」で収穫期（収穫後、果面に黒い斑点（小黒斑症状）が発生し、製品率低下の大きな要因となっています。この症状は①亀裂を伴わない斑点、②亀裂を伴う斑点の2つに大別されます。（下段写真参照）

今年度のりんご防除暦11回目にペフラン液剤1500倍を散布することにしておりませんが、①の症状に対しては、ペフラン液剤で症状低減が認められております。昨年度発生していない園地でも、今年発生する可能性がありますので、ペフラン液剤は必ず散布しましょう。②の症状については、ペフラン液剤散布による発生低減は無く、土壌pH



①亀裂を伴わない黒斑点
(ペフラン液剤の効果あり)



②亀裂を伴う黒斑点
(ペフラン液剤の効果なし)

の低い園地で発生が多い傾向にあるようです。石灰資材を散布し、土壌改良に努めましょう。



生育が早いので、収穫時期を考慮しながら計画的に作業を行いましょ。